

(2) 語彙体系による河川地形環境認識の把握について

A Study on Geomorphological Cognition of River through Vocabulary Systems

笹谷康之*

中村良夫**

Yasuyuki SASATANI* Yoshio NAKAMURA**

ABSTRACT; Vocabulary systems are expected to express inter-subjective differentiation of landforms. The aim of this paper is to interpret geomorphological cognition, through case study of river landforms by means of fisherman's terms. As a result, river beds are classified into 12 categories, from a deep pool to a shallow stream, by criteria of following elements, which are depth, the velocity of a stream, material of a river bed, width ratio of a deep pool to a point, and a visual character of water surface. Fishing points are named after these elements, direction of a stream, a pool, a riverside, water route, and a position on a cross section and a longitudinal section. With this folk knowledge, an expert fisherman reads stones accurately one by one to choose fishing points. The results shows that vocabulary systems effectively reflect man's environmental cognition.

KEY WORDS; Environmental cognition, River Geomorphology, Vocabulary Systems

1. はじめに

地形など環境を表す言葉には、科学技術用語以外にも多種多用の言葉が使われている。文化人類学では、欧米流の近代科学に対して、各民族が認識している知識体系を民族科学とし、それに基づいた用語の分類体系を民俗分類としている。そして、民族単位、部族単位、集落単位の生物・地形・方位・色彩などの民俗分類を世界各地の事例調査から報告して成果を挙げている。そもそも学問とは、用語が表す対象、概念を、より差異化し、一般化し、その包含関係を明示化することによって発展してきた。すなわち、地形語彙の体系を通じて、客観的で物的な地形ではなく、人々に認識されてきた共同主観的な地形環境を把握することができる。本研究では、河川を例に、地形環境の解明を試みた。

河川は古来より、治水、利水、舟運、魚釣り、徒渉、民俗行事、その他様々な活動に供せられる空間として利用されてきた。河床の変化や水量の増減に対応して、流域ごとに特定の河川地形の状態を表す方名（普通名詞の方言）が与えられてきたし、河川空間のなかで重要な場所には地名が与えられてきた。堤防の決壊地点を示す押切、用水のために設けられた堰、ヒ渡・渡・渡戸と呼ばれ渡渉点、身を清める垢離場などである。河川の場合、方名が固有名詞として定着したのが地名であるが、河道が変わるたびに定着した地名が消滅することがあった。諸活動に共通する名称もあるが、とりわけ舟運と川漁は、それぞれ船頭・川漁師の仲間内で通用する豊富で独自の方名・地名を有してきた。舟運においては、難所となる暗礁・渦巻・瀬などの

* (株)地域開発研究所 Regional Development Consultants Co., Ltd.

**東京工業大学工学部社会工学科 Department of Social Engineering, Tokyo Institute of Technology

方名・地名が使われてきた。小野寺淳は現在残されている河川絵図を通じて、船頭による空間認識を論じている。¹⁾ ただ、河川交通は明治中期から大正期にかけて次々と廃止され、渡し舟、観光用の川舟を除いて、例外的にしか残されておらず、このため船頭からみた河川の地形環境の認識は現在に伝承されていない。これに対し、専門の川漁師は四万十川・長良川を除いては現在残されていないが、近年の釣ブームとともにレジャーとしての釣り人が増加し、川漁師の地形環境の認識は、釣り人に伝承されてきた。神奈川県中津川上流で事例調査を行った大塚博夫は、「木流しよりも川漁の方が川の細部に接するのでより細かな指示コトバを必要とした。」²⁾ と舟運より川漁の方名・地名が微細な河川地形を表現していることを述べている。そして23種の河川地形方名と、9種の河川位置方名を中津川上流の基本呼称として挙げている。³⁾ 近年、釣り場地図、釣り雑誌が多数発行され、特定の流域で一部の職業集団に共有されていた方名・地名が、全国的な釣り仲間共通の専門用語として定着してきている。たとえば関東地方の各河川ではザラ瀬・ザラ場・ザー・ザーッポ・ザラッパなど多種多様に呼ばれていたのが、ザラ瀬に統一されていく。一方関西ではチャラ瀬に統一されていく。そのうち、「ザラ瀬は、ちゃらちゃら流れるチャラ瀬よりも、こころもち流勢のある所」⁴⁾ とみなされるようになっていったのである。

筆者が集めた釣りの地形環境を示す釣り人用語は、135 個も存在した。これらの用語は、主に釣り魚の生息環境を基準とした地形名称であり、場合によっては釣り人の足場や、足場へのアクセスも表している。こういった釣りの環境の総体を、釣り人は川相、溪相、流相などと呼んでいる。ダムを境に上流と下流では川相が違ふから釣り方を変えるなどと表現している。川相は一般的な名称、溪相は山地河川での名称、流相はスケールの小さい部分の名称である。安芸皎一が提唱した河相⁵⁾ と一脈通じそうな名称である。また川相を見て、その場にあったポイント、用具、仕掛け、エサ、竿さばきを選択することを川読みという。今後、河川計画において、川相を保全し、釣りの地形環境を保全する観点を加えることが必要であろう。以上を踏まえ、本研究では、釣り人によって使われている語彙を事例に、語彙体系による環境認識研究の有効性を検証していく。なお、特にことわりがある場合を除いて、釣り人用語の解釈には、名人が記した本を参考とした。⁶⁾

2. 河川地形の大分類

川釣りでは、上流を溪流、中流を清流と呼んでいる。溪流釣りの中心はイワナ・ヤマメであり、清流釣りの対象はアユ・ウグイ・オイカワである。主としてアユは瀬、ウグイは淵、オイカワはその中間に生息する。本格的な釣り人が多く、最も多くの釣り大会が開かれているのがアユ釣りである。アユは川の女王と呼ばれ、アユ釣りだけの専門誌も発行されている。アユ釣りが中心となって、釣り技術が向上し、河川の地形環境を表す標準用語が定着していったと言える。池沼・小川を含む下流域ではコイ・ヘラブナ・マブナ・モロコ・ナマズ・ライギョなどが釣れる。ヘラブナ釣りには最も多くの愛好者がおり、マブナも含め、「フナに始まりフナに終わる」という釣りの名言すらある。ただ、ヘラブナ・マブナは比較的河川の変化が少ない下流に生息しており、地味な釣り魚なので、鮎釣りには地形の専門用語はあまり使われていない。溪流釣りでは、わらじばきで登る伝統的な沢登り用語、トラバースなど独語の影響を受けた近代登山用語、ルアーフィッシュ・フライフィッシュなど北米の釣り用語などが使われているが、こと釣り場(ポイント)用語はブッシュ下など一部の例外を除くと日本語の語彙だけでできている。

河川生態学では、生物の生息環境の分類に、下記に示すA・Bと、a・b・cの記号を組み合わせた、A a・B b・B cの3つの河川形態型が使われている。⁷⁾

A：一つの蛇行区間に多くの瀬と淵が交互に出現する

B：一つの蛇行区間に瀬と淵が一つずつしか出現しない

a：瀬から淵へ滝のように落ちこむ

b：瀬から淵へ波立ちながらなめらかに流れこむ

c：瀬から淵へ波立たずなめらかに

流れこむ

一方、地形学・河川工学では、流域地形を基準に川を山地河川と平地河川に大別し、さらに平地河川を扇状地河川・自然堤防帯河川・三角州河川に分類している。表1に示すように、溪流

はA a型に相当し、河岸段丘を持たない山地の欠床谷を流れる。これを地形分類から峡谷河川と定義した。清流はB b型に当たり、河岸段丘を有する山地の床谷や、扇状地を流れる河川である。扇状地河川は、自然のままに放置すると、洪水のたびに流路を変えて網目状のあばれ川となるが、河川改修の進んだ現在では、河道が直線的に整備されていることが多い。こういった滑らかに流れ込む平滑な直線水路を、釣りでは平溪(ヒラカワ)と呼んでいる。B c型は自然堤防帯河川、三角州河川に相当する。自然堤防帯河川、三角州河川、平地の小川・池沼は、いずれも水流がおだやかで、生息している魚種も類似しているので、総称して緩流と定義した。溪流・清流・緩流といった大スケールの河川地形の認識区分は、生態学や地形学からみた区分とおおむね対応しているのである。

表1. 河川地形の大分類

河川型	川相	地形分類	河床勾配	河川地形語彙の例	釣魚	
A a	溪流	峡谷河川	~1/10	落込・ブツツケ・細	イワナ・ヤマメ	
B b	清流	床谷河川	1/10~1/50	ドブ・馬の瀬	アユ・ウグイ	
	平溪	扇状地河川	1/50~1/500	中州・河原	オイカワ	
B c	緩流	大川	自然堤防帯河川	1/1000~1/2500	淀・ワンド	コイ・モロコ
			三角州河川	1/5000~		マブナ
		小川			江・間	ヘラブナ
		池沼		江湖・切れ処	ライギョ	

表2. 流相の類型

河床型	水深	流速	底質	幅員比	水面
淵	2 m~	1 km/h以下	砂泥		
深瀬・大瀬	1.5 m~	1 km/h以下	小石~砂		
瀬・瀬場	80 cm~	1 km/h	小石~砂		
浅瀬・瀬瀬	80 cm~1.5 m	1 km/h	小石~砂		
深瀬・瀬瀬	60 cm~1 m	1 km/h	小石~砂		
鰈の瀬	40 cm~80 cm	1 km/h	小砂利		鰈・透かし
平瀬・浅瀬	40 cm~80 cm	2 km/h	小石		瀬波さざ波
チャラ瀬	10 cm~20 cm	3 km/h	小石	1/2	小波
ザラ瀬・ザラ場	20 cm~40 cm	3 km/h	小石	1/2	小波
早瀬	40 cm~80 cm	3 km/h	中石玉石	1/3	中波
荒瀬・ガシオン瀬	40 cm~80 cm	3 km/h以上	大石角石	1/4	大波・白波
白瀬・激流	40 cm~80 cm	3 km/h以上	大石角石	1/5	大波・白波

3. 流相

河床は一般的に淵と瀬で構成されている。河川生態学では、清流の瀬をさらに2分し、水面がしわのような波で底質に沈み石のある平瀬と、水面が白波立ち、平瀬より流速が早く、底質に浮き石がある早瀬に分類している。そして淵、平瀬、早瀬を比較する項目として、水深・水面・流速・底質を掲げている。⁸⁾ 一方、清流釣りの名人の村田満は、アユの友釣りの立場から幅員(淵幅との比)・流速・水面を基準に、河床を淵・トロ場・平瀬・チャラ瀬・早瀬・荒瀬・白瀬の7つに分類している。⁹⁾ 本研究では、以上の2点を基本に、他の川釣り文献の用語も参考にして、河床をさらに細分化し、表2にまとめた。村田の分類に比べ深場は5/2、浅場は7/5に増えている。実際の川釣りでは、釣りの名人はこの名称と基準に従って、河床を明確に12に分類しているわけではないが、対象河川、釣り魚、水量、季節、時間に応じて、個々の釣り人が自分のやり方で河床をかなり細分化して認識区分していることは確かだ。村田の分類は、瀬の石を読むアユの友釣りを基準とした分類であり、深場を対象とする釣りでは、より深場が細分化して認識されているであろう。瀬の幅員が狭ければ狭いほど、流速が速まり、水面の変化が激しくなる。また底質の材料は、流速が早くなればなるほど、掃流(侵食)され、角ばった大きな石が、不安定な浮き石として残されることになる。河床勾配が大きく、流速が大きくなるほど、大きな力で侵食されるのである。

瀬の水深は浅い方から順にチャラ瀬・ザラ瀬・平瀬・深瀬とされている。水面は静かな状態を鰈・透かし、流れで流紋を描いている状態をしわ波・さざ波・白波・うねりなどのように表現されている。物理的にみれば、水面の形態は水面の振動である波ではなく、水の移動である流れであるが、釣り人は水面の流形を波という語彙で認識しているのである。

釣り人は、水深・流速・底質・幅員比・水面の組合せを基準に、多様な専門用語を用いて河床を弁別してきたのである。こういった河床環境の総体を、本論では釣り用語に従って流相と定義した。

4. 河道の断面構成

河道の横断面は、表3、図1のように足場のある川岸から中央へ向けて、際(極辺地)・辺地・中沖・沖目・沖と呼ばれる。対岸の川辺は向こう辺地と呼ばれている。清流の瀬を例にとれば、辺地はタルミに、中沖は瀬脇に、沖は流心に対応する。瀬脇の水深が急に変わる場所は、駈け上りと呼ばれている。河川の曲流部では、攻撃斜面側が深くなり、滑走斜面側に寄州ができ、河道横断面は偏心する。

表4、図2は、溪流の標準的な縦断面である。落差(滝)では、肩(滝頭)から落口(滝口)に流れ込んで水が泡立ち、釜(滝壺)の中で巻き返す。幅員が広い釜には、袖が存在する。水深が急に浅くなる駈け上りから、水が払出される。溪流の瀬には大石があり、石の両側が水道(ミヅミ)と呼ばれる流路となる。石裏には小さなタルミができ、その周辺には、落差によって水が左右にひねられたヨレや、上下に回転したまくれ・巻き込みが発生する。表5、図3は標準的な清流の縦断面である。河川生態学という河川形態型では、平瀬・早瀬・淵の反復で清流は成り立っているとされている。これをより細かくみていくと、瀬・淵のそれぞれに瀬頭・瀬尻、淵頭・淵尻がある。瀬尻と淵頭、淵尻と瀬頭はおおむね近くの地点を指しているが、厳密には場所が異なる。瀬尻は水の色が濃くなり川底が見えにくくなった点であり、淵頭は瀬から流れこんだ水が静まり水面が深緑に見えるはじめた地点で、瀬尻より少し下流にある。一方、淵尻は、水面の深緑が淡くなり、静かな水面に引きこまれる流水にしわが表れた地点であり、瀬頭はそのすぐ下流で底石が見え波紋が立つ地点である。早瀬の下流には瀬落の平瀬がある場合とない場合があり、淵の前後には静があったりなかったりする。勾配が急な清流では、例外的に平瀬をとばして淵から早瀬に移ったり、早瀬-静-早瀬と続くことがある。実際の川は多様な流相の変化を見せてくれるのである。

表3. 河道の横断構成

横断位置	向こう地	向こう辺地	中沖	沖	沖目	中沖	辺地	際・極辺地
瀬		タルミ	瀬脇	流心		瀬脇	タルミ	

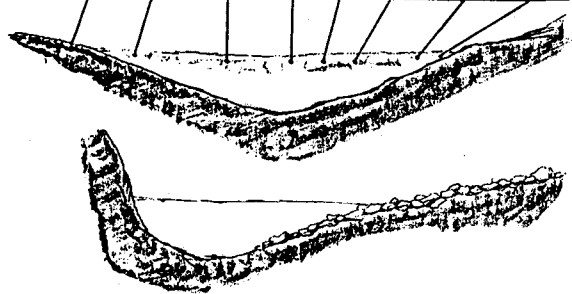


図1. 河道の横断構成

表4. 溪流の縦断構成

縦断面	急瀬	落差・滝				大石	
		肩・滝頭	落口・滝口	釜・淵 壺・滝壺	淵尻 駈け上り	石まわり 根まわり	石裏
水面			泡立ち 白泡	巻返し 晒し場 白泡のれ	流出し 払出し 開き	サラ流れ 溝 樋(ト) 樋(トイ) 水道(ミヅミ)	タルミ 巻込み まくれ ヨレ 瀬溜り 巻返し

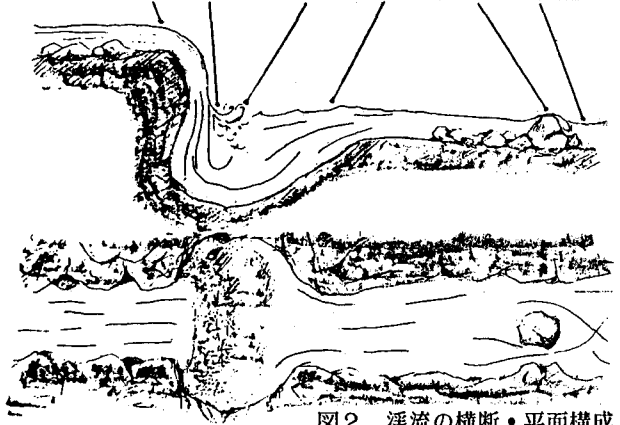


図2. 溪流の横断・平面構成

表5. 清流の縦断構成

ポイント	瀬頭・瀬頭	瀬尻・平瀬	早瀬	瀬落の平瀬	瀬落・瀬尻	淵頭	淵	静場	淵尻・駈け上り
水深		浅い	浅い	浅い			深い		
水面	波頭	しわ波	まくれ	しわ波	しわ波	波消し	淀む	淀む	淀む
流速	加速	2km/h	3km/h	2km/h	2km/h	減速	1km/h	1km/h	加速
底質	沈み石	沈み石	浮き石	沈み石	沈み石	沈み石	砂泥	石～砂	砂～石
備考				少数例					



図3. 清流の縦断構成

5. 河道の特異点

釣り場という用語は、釣り糸をたれる魚の生息場でいわゆるポイントと呼ばれる地点と、釣り人の足場との2つの場所を指している。ここでは河道の特異点であるポイントの特性について論じる。河床の変化点、あるいは河岸の特徴部などの河道の特異点は、川読みの基準である。こういった河道の特異点を整理分類したものが表6である。なお表2に示した流相を表す語彙や、表3に示した横断的な位置関係を示す用語の一部は、特異点でなく河道の一般部を表す語であるので、表6から除いた。ドゥ・サラ流れのように擬音語との複合語、ブツケ・ブン抜けのように衝撃を直截的に表す動詞の語幹との複合語、廊下・蒲鉾のような地形形態のアナロジーを表す語、流込み・吸込み・吐出しのように水流そのものを示す複合動詞の連用形などによって表現されていることが特徴的である。これらの語彙には、河川全域で呼ばれる語もあれば、地形などの条件から溪流・清流・緩流と限られた川相にしか存在しない語もある。

合流・曲流・分流の部分には多くの名称が与えられている。合流部では落合・出合のように2本の水流の合流を示す呼称、川俣・二俣のように谷地形の分岐を指す呼

称、土合・ドゥのような合流の音響を表す呼称がある。エゴ・石河原のように河岸地形の名称、淀み・ドブ・江湖といった滞水部の名称、水道・滞筋にみられる流路の名称もある。ポイントを示す語彙は、流相の基準となった水深・流速・底質・幅員・水面や、横断面構成の基準となった足場との位置関係の他に、おおむね流向・流路・滞流部・河岸の状態を基準に命名されていた。

表6. 河道の特異点

ポイント	読み	一般語	命名基準	川相分類	ポイントの説明
流込み	ハレミ		流向・滞水	河川全域	懐・ワンドへの流れ込み
流出し	ハレミ		流向・滞水	河川全域	懐・ワンドからの流れ出し
落合	ハレミ	合流	流向	河川全域	2本の水流が合流するイメージ
出合	ハレミ				本流に支流が流れ込む
流込み	ハレミ				本流に支流が流れ込む
払い出し	ハレミ		流向・滞水	河川全域	滞水部から流出する
開き	ハレミ		流向・滞水	河川全域	滞水部から流出し河道が広がる
川俣	ハレミ	合流	流向	溪流	二俣谷の地形形態
二俣・二瀬	ハレミ				水がぶつかりあう音のイメージ
土合	ハレミ				
ドゥ・ドゥ場	ハレミ				
廊下	ハレミ	緩急谷	川岸地形	溪流	両岸が切り立った谷
細	ハレミ		川岸地形	溪流	細流が流れ込む極めて小さい沢
エゴ	ハレミ	洞穴	川岸地形	溪流	水の中にある石の横穴
エグレ	ハレミ				
懐	ハレミ				
押しまり	ハレミ	魚止め	滞水	溪流	これ以上魚が通しにくい地点
魚止め	ハレミ				
ブッシュ下	ハレミ		川岸植生	溪流	藪が覆いかぶさっている地点
ボサ下	ハレミ				
ガレ場	ハレミ	ガレ場	川岸地形	溪流	土砂崩れでできた岩石地
湧き口	ハレミ		川岸地形	溪流	川岸の絶壁の湧水点
落ち口	ハレミ		流向	溪流	川岸の絶壁の湧水の落地点
さら流れ	ハレミ		流路	溪流	勢よく流れる流路
樋・溝	ハレミ				
水道	ハレミ				
岩盤	ハレミ	岩盤	底質	溪流	岩盤が露出した川底
岩	ハレミ		底質	溪流	川底が平滑な岩石
溜床	ハレミ				
ナメラ	ハレミ				
袖	ハレミ		川岸地形	溪流	滝・落込みの下の川岸の水溜り
片袖	ハレミ				
両袖	ハレミ				
ブツケ	ハレミ	曲流部	流向	溪流	川の屈曲点、攻撃斜面側を指す場合が多い
ハガレ	ハレミ				
曲リッパナ	ハレミ				
瀬廻り	ハレミ		滞水	溪流清流	瀬の中の小さな緩流部
たるみ	ハレミ		滞水	溪流清流	石裏・瀬の中の小さな緩流部
ドブ	ハレミ		滞水	清流	水深1以上、緩い流れ、底石あり
蒲鉾	ハレミ		地形形態	清流	瀬の中の盛り上がった場所
馬の瀬	ハレミ				
中州	ハレミ	中州		清流	
河原	ハレミ	寄州	河岸地形	清流	
石河原	ハレミ				
寄州	ハレミ				
クビレ	ハレミ		幅員変化	清流	淵が浅られ流速が速くなる地点
吸込み	ハレミ		流速変化	清流	水流が速くなり吸込まれる地点
吐出し	ハレミ	分流部	流向	清流緩流	川水の取水口
淀・淀み	ハレミ	淀み	滞水	清流緩流	水が溜まっている深場
江湖	ハレミ	洪水でできた沼	滞水	緩流	洪水のときにできた沼
切れ処	ハレミ				
ブン抜け	ハレミ				
江・間	ハレミ	川水脈		緩流	低地にある用水路
滞筋	ハレミ	河口部	流路	河口	河口部にできた水路
ワンド	ハレミ	湾入	河岸地形	緩流湖沼	湾入した場所

6. 結語

このように、釣り場の河川地形環境を表す用語は、釣果を得るという目的のために差異を表す多様な語彙体系を有していた。この体系をまとめると、以下のようになる。

- ①. 川を主とする内水面はその地形環境から溪流・清流・緩流に大別できる。
- ②. 河床は水深・流速・底質・幅員・水面を基準に流相が認識されていた。
- ③. 河道の横断面・縦断面の一般的な構成が明らかになった。
- ④. 川釣りのポイントでは、水深・流速・底質・幅員・水面といった流相の5つの要素の他に、流向・位置・流路・滞流・河岸の5つの計10個の指標が、認識の基準となっていた。

語彙体系による分析は、人々の認識に基づいた地形環境の解明に有効な手段であった。釣りにおける河川地形環境の認識では、他の諸活動における認識に比べより微細な環境であり、ディテールを読んでいる。名人と呼ばれる釣り人は、ここで論じた以上に一個一個の石を読んでいる。鮎釣りの名人は、魚影を見なくとも、何時頃どこの石の脇に一匹の鮎がなわばりを持つかを正確に当てると言う。

本研究ではそういったディテールまで論じられなかったが、川読みについての基本的知見が整理できた。ともすれば近年の河川改修は、河道を直線化し、河床勾配を平準化し、画一的な河景を生みだしているが、こういった川釣りの豊富な語彙で認識できる多彩な河景が保全・育成されていくことが望まれる。さらに、河川以外の地形に対しても、特定の集団で経験的に使われてきた語彙を用いて、豊饒な環境認識が解明されていくことが期待される。

文献

- 1) 小野寺淳(1989)絵図にみる近世富士川水路の空間認識 葛川絵図研究編 「絵図のコスモロジー 下巻」 地人書房
- 2) 大塚博夫(1973)小地名としての川筋名の考察—神奈川県中津川上流の場合— 日本民俗学 No90 P58
- 3) 2) P55-64
- 4) 友釣りスペシャル No3(1989) 週刊釣りサンデー P94
- 5) 安芸皎一(1951)河相論 岩波書店
- 6) 文献 2), 4)
つり人社編(1981)海・川釣りエサ百科—付・釣り用語事典— つり人社
芳賀故城(1986)川づり入門 有紀書房
井上博司(1987)川・湖沼づりを始める人のために 池田書店
野口哲雄(1983)溪流づり入門 高橋書店
村上正太郎(1975)ヤマメ・イワナ釣り入門 西東社
桑原玄辰(1982)イワナ・ヤマメ釣り 廣済堂出版
古川トンボ(1985)アユ泳がせ釣り入門 廣済堂出版
村田満(1982)最新アユ釣り全科 廣済堂出版
岡秋雄(1977)清流釣り入門 永岡書店
- 7) 水野信彦・御勢久石衛門(1972)河川の生態学 箱地書館 P4-13
- 8) 7)
- 9) 村田満(1989)瀬といまの友釣り「友釣りスペシャル」N03 週刊釣りサンデー P105-106